介護老人保健施設ライフサポートねりま

症　例　概　要　利　用　者:　100歳代　女性　要介護3

病　　名　認知症　狭心症　右大腿骨転子部骨折の術後

利用ｻｰﾋﾞｽ:　入所

経　　過：2021年6月に転倒して右大腿骨転子部骨折。A病院での術後、リハビリ目的のため当院回復期に入院するも、数日後に左下腿内側の皮下出血部分が潰瘍化、A病院に再入院。その後、経過良好にて再度当院へ転院してリハビリ実施後自宅へ。主介護者の長女の入院に伴い、その間の介護とリハビリ目的で当老健に入所された。

内　　容

「いいの、いいのよ」が口癖であり、自身で行える事は自身でという姿勢で気丈に過ごされていました。高度の難聴でしたが、補聴器使用と筆談やジェスチャーを交えながら、笑顔を引き出すコミュニケーションを心掛けました。また、集団体操や塗り絵・折り紙作成のお誘いには、照れながらも毎回参加される姿が印象的でした。そして、何よりも食べることが大好きでして、いつもとびっきりの笑顔を見せて全量摂取される姿にスタッフは皆、感動していました。

そんな中で高齢という事もあり、徐々に日常生活内で変化が見られるようになりました。転倒リスク大や尿汚染の増加、清潔な物と汚染物の区別がつかない等あって、今年の春には嘔吐等の胃腸症状、息切れ、酸素量の低下など厳しい状況にて医師からは終末期の説明が行われました。

面会頻度を上げたりとご家族の協力を得ながら、スタッフ間での情報共有を密に、そして、酸素吸入や利尿剤の投与など医療行為も実施する日々の中で、まさに奇跡と言えるような看取りの状態からの復活を遂げました。

その後、無事に100歳の誕生日を迎えることができまして、口癖の「いいの、いいのよ」を耳にすることと、毎食全量摂取され、とびっきりの笑顔で「ごちそうさまでした」のお声を聞くたびに、ケアの大切さと深さを認識させられる良い事例となりました。

看護師・ケアワーカー … ご本人のペースを尊重したケア

セラピスト … ご本人の状況を綿密に把握し、それに応じたリハビリの実施

医師 … 適切な医療の提供